

【研究ノート】

海保青陵「談五行」訳注稿（1）

坂本 頼之

「談五行」は江戸時代の漢学者海保青陵（1755 ～ 1817）の五行解釈について述べた書である。原文は漢文であり、その成立は先行研究によると不明とされる（注 1）。

内容は中国思想の所謂「五行」を青陵が解釈したものであり、その解釈は他の青陵の著作に見えている解釈とほぼ同様のものであるが、違いもみられる（注 2）。この五行解釈の違いに着目することで、「談五行」は青陵の思想形成の過程を明らかにする材料となり得る貴重な資料であるが、公表された「談五行」に関する研究は管見の及ぶ限りではない。そこでここにまず訳注を試みる次第であるが、原文と註釈の分量の問題で、本稿では「談五行」の前半部分のみとなる。

「談五行」は滝本誠一氏編著『日本経済叢書』巻二十六（日本経済叢書刊行会 一九一六年七月（以下『叢書』と記述））に所収・刊行されたものが、同じ滝本誠一氏編著の『日本経済大典』第二十七巻（啓明社 一九二九年六月（以下『大典』と記述））に再録されている。また蔵並省自氏編『海保青陵全集』（八千代出版 一九七六年九月（以下『全集』と記述））にも収録されているが、こちらも『叢書』所収のものを底本としたことが「付記」（『全集』p.5）に記されている。『叢書』に所収された「談五行」が何を底本にしているかは、滝本氏が明らかにしていないため不明であるが（注 3）、本稿では『叢書』所収の「談五行」を底本とし、『大典』『全集』を併せて参照した。いずれの「談五行」にも句読点と返り点が施されており、基本的にはそれに従って訓読している。「談五行」原文は一つの文章となっているが、本稿では内容により適宜区切っていくつかの文章に分けて番号をふり、【原文】【書き下し】【現代語訳】の順に記した。また【原文】の次に『叢書』『大典』『全集』ごとに異同がある場合注をつけた。青陵の語句の解釈は独特のものが多いため、

訳注にあたっては青陵の著作を参考として解釈することに努めた。青陵の著作の引用の際には『全集』を用い、引用した箇所を頁数を附している。青陵の著述は片仮名漢字交じり文が殆どだが、引用の際には参照の便宜上平仮名漢字交じり文に改めた。また引用された各経典を参照する際には『十三経注疏附校勘記』（中文出版社 一九七九年）を用いた。

- （注 1） 藏並省自氏は『海保青陵経済思想の研究』（雄山閣出版 一九九〇年十一月）の第二章「著作と成立年代」の中で青陵の著作の成立年代について考察されているが、「談五行」については、その「三 著作年代不明確の書目」の中で「本文に記述された内容からは推定困難である」（p.36）とし、青陵の他の著作の記述からも成立年代の推定が困難であると述べている。
- （注 2） 青陵の五行解釈がまとまった形で述べられている書に『洪範談』がある。よって本稿でも特に『洪範談』を訳注を行う上での参考としたことが多い。ただし『洪範談』と「談五行」の五行説にも大きな違いがある。『洪範談』の学説がまとまった時期は、その中で青陵が「此二十年ほど以前、四十近ふなりて解せたり」（『洪範談』『全集』p.586）と述べている。
- （注 3） 『叢書』巻二十六において、滝本氏は巻二十六所収の「談五行」の底本に何を用了かを解題で明らかにしていない。しかし同じ滝本氏の編による海保青陵の著作をまとめた『日本経済叢書』巻十八（日本経済叢書刊行会 一九一五年十一月）の解題に、「本巻に収録する経済談の原本は、洪範談（坂本）の外、皆写本にして、往々誤写若くは脱漏あるも、此等の諸書は皆悉く流伝、極めて稀少にして、何れの図書館目録にも、其の書名さへ見え、随つて他本と対校補正するの途なくして、遺憾ながら編者収蔵の原本のまま、これを刊行したり」（p.37-38）とある。この巻十八には「談五行」は収録されていないが、巻十八の解題中で滝本氏は「「商交易有無、非化物者、非生物者、非造作者、乃空位也」（其著「談五行」にあり、「談五行」は本叢書に収容せず）」（p.35）と「談五行」の文章を引用しており、巻十八を編集する段階で滝本氏は「談五行」を所持していたと思われる。以上のことを併せて考えるならば、「談五行」についても滝本氏所蔵の写本が底本となっている可能性が高い。

【原文（一）】

談五行

海保子曰、五非自然之数也、未有物之前、謂之無也、既有物、謂之一也、既有一、則必有上下、謂之二也、既有上下、則必有中、謂之三也、三為自然之常数也、五非自然之数也、

【書き下し（一）】

海保子曰く、五は自然の数に非ざるなり。未だ物有らざるの前、之を無と謂ふなり。既に物有り、之を一と謂ふなり。既に一有れば、則ち必ず上下有り、之を二と謂ふなり。既に上下有れば、則ち必ず中有り、之を三と謂ふなり。三は自然の常数為るなり。五は自然の数に非ざるなり、と。

【現代語訳（一）】

海保先生が仰った（注 1）。「五とは（こしらえごとであり）天地自然の理による数ではない（注 2）。まだあらゆる事物が出来ない以前、これを無という（注 3）。もう事物が出来上がった後、これを一という。事物が出来上がったならば、その事物には必ず上下がある。これを二という。もう上下があるならば、必ずその上下の中がある。これを三という（注 4）。（このように）三とは天地自然の理によるいつも変わらぬ数であり（注 5）、五とは（こしらえごとであり）天地自然の理による数ではない」と。

（注 1） 「海保子」と尊称である「子」が附されており、この「談五行」という文章が海保青陵自ら著したものではなく、弟子にあたる者による口述筆記であることを示唆している。以後「談五行」は問答体により進行するため、問いを發している人物による筆記とも考えられるが、それが複数なのか単独なのか、何者であるのかなど、現時点では全て不明である。青陵の呼称についていえば、同じく弟子による口述筆記の『洪範談』では「先生」（『全集』p.583）「青陵先生」（『全集』p.585）と称されており、青陵自身が問答体をとって著している『經濟話』においては、青陵は「鶴」（『全集』p.340）と自称している。これらのいずれとも「談五行」の呼称「海保子」は異なっている。

（注 2） 『洪範談』（『全集』p.591）に「如此に三つづつにわくれば、どこまでも自然の

海保青陵「談五行」訳注稿（１）（坂本）

数なり」とあるように、三を絶対のものとして事物を考えることが青陵の解釈となる。そのため所謂「五行」と呼ばれるものも、『洪範談』においては「五と云自然の数はどこまでもなし。三と一とか、三と二とかいへばよきなり」（『洪範談』『全集』p.698）として、代表的な水・火・土三つと氣一つ（氣は陰陽なので二つ）と解釈している。また「自然」とは「作りこしらへたるものにあらず。天地自然の理なり」（『洪範談』『全集』p.606）、「こしらへたるにあらず」（『全集』『老子国字解』p.861）と、人為の反対の天地自然の「理」であり、「真の」（同上）ものとされる。また『天王談』には「自然とは理の事也。理こそ自然なり」（『全集』p.510）とあり、自然とは「理」のことだとされている。青陵の「理」とは「さなければならぬ筋」（『老子国字解』など多数）と定義されるものであり、「理」について詳しくは拙稿「海保青陵の理」（『東洋学研究』第五十二号 平成二十七年三月発行予定）を参照していただきたい。

（注 3） 無と有との青陵の解釈は『老子国字解』に「無は有を生ずるものにて、事物の出来る以前を無と云ふ。既に出来たる後を有と云ふ也」（『全集』p.802）とある。それに従って解釈した。また「既」という字は青陵自身が「既にとは、もはやそうしてしもふたといふ処へ用ゆる辞なり」（『洪範談』『全集』p.640）と説明しており、「物」については「物とは人をはじめ禽・獸・草・木凡そ天地間にあるとあらゆる物なり」（『洪範談』『全集』p.606）とあるのをそれぞれ参考にした。

（注 4） 『老子』四十二章「道生一、一生二、二生三」の青陵の解釈に基づく。『老子国字解』において青陵は四十二章の文を、「凡そ万物は、草木人獸より其生するは皆左なければならぬすじにて、無より有に出る也。是れ道が一を生ずる也。一物を生ずるとひとしく一物に上下あり。是れ一が二を生ずる也。上下と二つあれば、是非中といふ名を生ずる也。是二が三を生ずる也」（『全集』p.901）と解釈している。「談五行」のこの文は『老子』に基づくと考えられるため、『老子国字解』を参考に解釈した。

（注 5） 「常」は「常はあひかわらぬと訓ず」（『老子国字解』『全集』p.800）や「いつもあひかわらぬものなり。是を常と云ふ」（『洪範談』『全集』p.621）といった青陵の解釈を参考にした。

【原文（二）】

或曰、子之説五行、可得聞乎、

曰、可也、凡自高而下者、猶水也、自卑而上者、猶火也、在其中、而相反相凝者、猶土也、以所居而言、則水在上、火在下、以所歸而言、則水在下、火在上、迭配最高最卑、最高猶天上也、最卑猶地下也、其氣升其形降者為土、以配中常、中常猶人也、故水火土三者、無甚輕重、無甚貴賤、齊儔均匹、可相駢言也、金与木者、固土之部属、既言土、則金木從矣、故以比三者、則甚輕賤、如取金木充其数、則何啻金木乎、同其位者必多、故曰、三為自然之常数也、五非自然之数也、

【書き下し（二）】

或ひと曰く、子の五行を説くは、聞くを得べきか、と。

曰く、可なり。凡そ高きより下る者は、猶ほ水のごときなり。卑きより上がる者は、猶ほ火のごときなり。其の中に在りて、相ひ仮り相ひ凝る者は、猶ほ土のごときなり。居る所を以て言へば、則ち水は上に在りて、火は下に在り。歸する所を以て言へば、則ち水は下に在りて、火は上に在り。迭ひに最高最卑に配す。最高は猶ほ天上のごときなり。最卑は猶ほ地下のごときなり。其の氣は升り其の形は降る者は土為り。以て中常に配す。中常は猶ほ人のごときなり。故に水火土の三者は、甚だしき輕重無く、甚だしき貴賤無く、齊しく儔、均しく匹、相ひ駢べて言ふべきなり。金と木とは、固より土の部の属なり。既に土を言へば、則ち金木從ふ。故に以て三者に比ぶれば、則ち甚だ軽く賤し。如し金木を取りて其の数に充つれば、則ち何ぞ啻だ金木のみならんや。其の位を同じくする者必ずや多し。故に曰く、三は自然の常数為るなり。五は自然の数に非ざるなりと、と。

【現代語訳（二）】

ある者が「先生の五行についての説をお伺いすることはできますでしょうか」と尋ねた（注1）。

海保先生は仰った。「よろしいでしょう。いったい高いところから低いところへと下るものは全て水に代表されるものである（注2）。低いところから高いところへと上るものは、全て火に代表されるものである（注3）。その両者の中ほどに位置して（注4）、両者をともに利用し（注5）、両者の中で

固まり動かないものは（注 6）、全て土に代表されるものである。そもそもの位置でいうならば、水は上に位置し、火は下に位置する。帰結するところ
でいうならば、水は下に帰結し、火は上に帰結する（注 7）。（このように水と火は）交互に最高と最下に割り当てられる。最高はちょうど天の上のようであり、最下はちょうど地の下のようである。（火や水と異なり）気は上へと昇り、形が下へと下るのは、土に代表されるものである（注 8）。そこで中ほどにして、あいかわらぬものに割り当てられる。中ほどにしてあいかわらぬものとは、ちょうど人のようなものである（注 9）。だから水・火・土の三つは、その重要性に甚だしい差はなく、その価値に甚だしい差はなく、ともにひとしく仲間であって、ともに並列して言及されるべきものである。（それに対して）金と木は、本来土に代表されるものに属している（注 10）。土が言及されたならば、金と木は付き従う。だから水火土の三者と比べると、金と木は大変重要性が低く、また価値も低い。もし金と木を取り上げて象徴的なヶ条に当てはめようとしたならば、どうして金と木だけが当てはまることがあるだろうか。金と木と並び立つようなものは、きっと沢山あるはずである（注 11）。だから私は「三とは天地自然の理によるいつも変わらぬ数なのであり、五とは（こしらえごとであり）天地自然の理による数ではない」というのである」と。

（注 1） 「五行」について青陵は「行は一とくだり二たくだりといふ、くだりと云事なり。ヶ条なり」（『洪範談』『全集』p.606）と「五つのヶ条」としている。何についての五ヶ条かというと「天地自然の理」（同上）について「水・火・土・陰・陽の五つ」（同上）の天地自然にある物のうちの根本を並べ立てたものであるとする。

（注 2） 青陵は「水」について「是其位は上に居りて、下へくだるもの、総本家なり」（『洪範談』『全集』p.606）と説いている。「総本家」とあるように、ここでの「水」とは、「水」に代表される「水の気で出来たるもの」（同上）「凡そ水の性を得たるもの」（『洪範談』『全集』p.618）のことであり、水そのもののことではない。そのため訳文に「代表」という表現をいれた。「水」と同様に「水とは水の事ではなし。水とは火の事ではなきなり。こころいきが水のこころいきじやといへば、生きておるなり」（『洪範談』『全集』p.616 原文ママ）と、「火」も

「火」そのもののことではない。以下「火」「土」も同様に解釈している。

- （注 3） 「火の性は物をかわかして、上へ上へのぼる勢の猛なるものなり」（『洪範談』『全集』p.619）
- （注 4） 「水・火・土は実位なり。上・中・下といふも同じ事なり」「土は中の位なり」（『洪範談』『全集』p.615）とあるように、ここでの「中」は位置としての「中」の意味が強い。
- （注 5） 青陵の解釈では「天・地・人といふて世界の万物三つあり。水・火・土といふも同じ事なり」（『洪範談』『全集』p.621）と、天地人の三才でいうと、天は水、地は火、人は土にあたる。そしてその人の役割は、『老子国字解』「三の内にて第三ばんめに出来たる人は、智慮あるゆへに、木をきりては宮室をこしらへ、石をつみては城池とするは、皆人の生ずるところ也」（『全集』p.902）や「今木は天の雨露と、地の氣にて大きくなる。其木を器用に作るは人なり」（『洪範談』『全集』p.621）等と述べられているように、人とは天地によって創造された物を利用して価値を生み出す存在であり、そのため天地と並び称されるとされる。「談五行」においても後文で「其の氣は升り其の形は降る者は土為り。以て中常に配す。中常は猶ほ人のごときなり」と述べているように、「土」に「人」が配されている。この人・土の役割として、原文「相仮相凝」の「仮」を「利用する」と解釈した。「仮」字を「よる」「利用する」と解釈する例は『荀子』勸学篇などにみえる。
- （注 6） 原文「相仮相凝」の「凝」を「固まり動かない」と解釈したのは、青陵の「土」の解釈に「土は中にいて動かぬ理をさしていふ」（『洪範談』『全集』p.615）、「土は中に居て、静にて物のできる方、うごかず居れ共、養う事甚しきゆへに、物ふえると云ふ事なり」（『洪範談』『全集』p.622）と、「火」や「水」が「動」なら「土」は「静」に配され動かぬものとのあるのを参考に解釈した。
- （注 7） 「居」を、対になっている「帰」との関係から、昇り下りする前の「そもその位置」と解釈したが、あるいは水・火・土や地・水・火・風のように、常に「水」が「火」に対して上にされることを述べているのかもしれない。青陵の五行説には「火は上席にて、水は下席に居そふなるものなれ共、水が上席なるは、高きより卑きに流るるは理中の順なり。下より上へのぼるは理中の逆なればなり」（『洪範談』『全集』p.608）と水火という順になる理由を説いている部

分がある。

- （注 8） 「其氣升其形降者為土」の解釈は難しい。そもそも【現代語訳（二）】（注 6）で述べたように、『洪範談』の五行説では「土」は動かぬものとされている。また後文に述べられているように「談五行」では「木」「金」は「土」に属するものとされており、「木」「金」を「氣」として「陰」「陽」に配当し、事物を水・火・土・氣の四つに分ける『洪範談』の説とは異なっている。そのため「談五行」では「土」に関連して「氣」と「形」とが述べられているが、『洪範談』では「氣」と「形」との関係が述べられるのは、「氣」とされる「木」「金」に関する記述の中である。その中に「氣は魂といふ事なり」（『洪範談』『全集』p.611）とある。また【現代語訳（二）】（注 5）で前述の通り、天地人の三才でいうと、天は水、地は火、人は土にあたる。人が「土」に配されるとするならば、ここで上へ昇る「氣」とは、人の死後天上へと昇る「魂」のことで、下へ降る「形」とは死後地に帰する「魄」のことを指しているかとも思われる。ここではこれらを勘案して解釈したが、後の課題として残る。
- （注 9） 【現代語訳（二）】（注 5）（注 8）に述べたように、青陵の説によれば、天地人三才の「人」は水・火・土の「土」に配当される。また「老子には水・火・土・氣といふ所を天・地・人・道といふ。天は火にあたり、地は水にあたり、人は土にあたり、氣は道にあたるなり」（『洪範談』『全集』p.611）と『老子』の天地人道の四大においても、人は土にあたるとされるが、天地に対する水火の配当が『老子国字解』と『洪範談』とは異なっている。
- （注 10） 「金」と「木」が「土」に属するとするこの解釈が、『洪範談』における五行説と「談五行」との大きな違いである。『洪範談』の解釈では、既に【現代語訳（二）】（注 8）で触れたように、「金」と「木」は「氣」であり陰陽である。「金・木は氣の字を二つにわけて、陰陽をかたりたるものなり」（『洪範談』『全集』p.611）「金・木の二つを合せて陰・陽の氣とす」（『洪範談』『全集』p.615）。そして「氣」は水・火・土とは異なるものとされる。「水・火・土は実位なり。上・中・下といふも同じ事なり。氣は空位なり。活物なり。上・中・下の間へはさまるべきものにあらざ」（『洪範談』『全集』p.615）。この違いを詳しく考察すれば、「談五行」の成立年代の確定、ひいては青陵の思想の成立過程を知る手懸かりとなるかと思われる。後の研究課題としたい。
- （注 11） 「万物のうちにて一項別にて、物の大將やくを勤むるものを五つならべるほど

海保青陵「談五行」訳注稿（１）（坂本）

ならば、風を出すべきはづなり。金・木を出すならば、石を出さねばならぬなり」（『洪範談』『全集』p.610）と、『洪範談』では「金」と「木」と並ぶものとして、風や石といったものがあげられている。

【原文（三）】

曰、子之説五色、可得聞乎、

曰、可也、凡色極濃者為黒、極淡者為白、其中為色、猶赤之赤、青之青也、是各其中而已、如以青赤黄、与黑白齒列（注 1）、則何啻青赤黄乎、故曰、三為自然之常数也、五非自然之数也、

（注 1）『大典』のみ「齒」が「齒」となっている。

【書き下し（三）】

曰く、子の五色を説くは、聞くを得べきか、と。

曰く、可なり。凡そ色の極々濃ひ者は黒為り。極々淡き者は白為り。其の中は色為り。猶ほ赤の赤、青の青のごときなり。是れ各々其の中なるのみ。如し青赤黄を以て、黒白と齒列すれば、則ち何ぞ啻だ青赤黄のみならんや。故に曰く、三は自然の常数為るなり。五は自然の数に非ざるなりと、と。

【現代語訳（三）】

ある者が「先生の五色についての説をお伺いすることはできますでしょうか」と尋ねた（注 1）。

海保先生は仰った。「よろしいでしょう。そもそも色というものを究極まで濃くしたものは黒である。（逆に）究極まで薄くしたものは白である。其の究極の濃さである黒と究極の薄さである白との間は、それぞれの色である（注 2）。それはちょうど赤という色の赤のことであったり、青という色の青のここのようなものである。これらの赤や青といったそれぞれの色とは、濃い黒と薄い白との中間というだけのものなのである。もし青赤黄といった色を黒や白と同列に並べるならば、どうしてただ青赤黄の三色だけにとどまることがあるだろうか。だから私は「三とは天地自然の理によるいつも変わらぬ数なのであり、五とは（こしらえごとであり）天地自然の理による数で

はない」というのである」と。

（注 1） 「五色」とは一般的な五行説によれば青・赤・白・黒・黄である。『周礼』冬官考工記などに見える。

（注 2） 「五色」というものに対して青陵は「五色といへ共紅もあり、緑もあり、碧もあり、紫もあり、いろいろありて五にあらず。それよりも極淡と極濃と中と三いろにわけける事よろし。今青にても、黄にても、極々うすふすれば皆白なり。極々こくすれば皆黒なり。然れば色は黒と白と中とより外なし。中とはてんでんのもちまへの色千百色ありてもよき事なり」（『洪範談』『全集』p.623）と、黒と白とその中間であるそれ以外の色との三つに分ける事を主張している。これを参考に解釈した。

【原文（四）】

曰、子之説五方、可得聞乎、

曰、可矣、己与左右為三、己与前後為三、極東為西、極南為北、且非如左右之可因己遷移也、既不属己、又無定位、豈有所謂五方者乎、故曰、三為自然之常数也、五非自然之数也、

【書き下し（四）】

曰く、子の五方を説くは、聞くを得べきか、と。

曰く、可なり。己と左右とで三為り。己と前後とで三為り。東を極むれば西と為り、南を極むれば北と為り、且つ左右の己に因りて遷移すべきが如きに非ざるなり。既に己に属さず、又た定位無し。豈に謂ふ所の五方なる者有らんや。故に曰く、三は自然の常数為るなり。五は自然の数に非ざるなりと、と。

【現代語訳（四）】

ある者が「先生の五方についての説をお伺いすることはできますでしょうか」と尋ねた（注 1）。

海保先生は仰った。「よろしいでしょう。自分とその左右とで三であり、自分と前後とで三である（注 2）。東に行き続けて極めると西となり、南に行

き続けて極めると北となるのは、また左右が自分に従って移動するのとは異なっている（注 3）。（東西南北は）まったく自分に属しておらず、また固定された位置もない。どうして貴方の言う五方などというものがあるだろうか。だから私は「三とは天地自然の理によるいつも変わらぬ数なのであり、五とは（こしらえごとであり）天地自然の理による数ではない」というのである」と。

（注 1） 「五方」とは、一般的な五行説では東西南北と中央を指す。

（注 2） 「己れが身一つありていへば、己れが上は上なり。己れが下は下なり。己れは中なり。是を自然の数といふ。己れが左は左なり。己れが右は右なり。己れは中なり。如此万物皆三つにわかるは万物の情なり」（『洪範談』『全集』p.591）とあるように、青陵は自らを基準として、前後と己で三、また左右と己で三と考えている。これを参考に解釈した。

（注 3） 東西南北という一般的な方位は相対的なものであるのに対し、自らを基準とした前後左右は、自らに従って移動しつつも、自らにとって常に前後左右であり絶対的なものであることを述べていると考えた。東西南北が相対的であるとは、この地上が球であり、東に行き続ければ西へと至ることから発想したかと思われる。青陵の世界観を表すものとして「天は地球の外空なる所を指ていひたる名なり。震旦は地球の万分の一の所也。天帝が地球万分の一の君が賢を尊び民を愛するゆへ、是を最辰に思召て、水旱をやらぬと云ふ理は万々なき事也」（『壁理談』『全集』p.450）と、天と地球の関係についての記述があるが、そこでは「地球」という名称を用いており、青陵はこの地上が球であることを理解していたようである。これは青陵が桂川氏との交遊から得た蘭学の知識からのものかとも思われる。ここではこれらを参考に「極東為西、極南為北」を「東に行き続ければ～」と解釈した。青陵と桂川氏の交流については、前述の藤並省自氏『海保青陵経済思想の研究』の第三章第二節「青陵の実学観に及ぼせる桂川氏の影響」（p.74-78）に詳しい。

【原文（五）】

曰、三之為常数、取徴於何書乎、

曰、質之於天地、証之於先王之礼、徴之於洪範、

曰、天地人三数既聞命矣、請問先王之礼、

曰、天子立三公・九卿・二十七大夫・八十一元士、后立三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻、三年一考、三考一績之類、尽依常数也、

【書き下し（五）】

曰く、三の常数為るは、徴を何れの書より取るか、と。

曰く、之を天地に質し、之を先王の礼に証し、之を洪範に徴す、と。

曰く、天地人の三数は既に命を聞けり。請ふ先王の礼を聞かんことを、と。

曰く、天子は三公・九卿・二十七大夫・八十一元士を立て、后は三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻を立つ。三年にして一考し、三考して一績するの類、尽く常数に依るなり、と。

【現代語訳（五）】

ある者が「三が相変わらぬ数であることは、その証拠をどの書物から選び取ったのですか」と尋ねた。

海保先生は「三が相変わらぬ数であることは、天地に問いただし、先王の礼から証しだて、洪範により証明した（注 1）」と仰った。

するとまたある者が「天地人の三の数については、もうそのおしえを伺いました（注 2）。先王の礼についてお聞かせ願いたいのですが」と尋ねた。

すると先生は「むかし天子が三公・九卿・二十七大夫・八十一元士をその地位につけ、天子の后が三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻をその地位につけたことや（注 3）、三年に一度功績を調査し、三度功績を調査して昇格降格を決定するといったような例などは（注 4）、みな全て三という相変わらぬ数を基準としている」と仰った。

（注 1） 「洪範」とは『書経』洪範のこと。洪範の内容は、周の武王が殷を倒した後、殷の賢者箕子に政治の心得を尋ねた際の箕子の返答が中心となっている。青陵はその洪範の内容を「天地の理を述たるもの」（『洪範談』『全集』p.595）と天理のあらましが説かれていてと考えて、門弟達に講義を行っていたようであり、その講義の内容が門人の武田尚勝によってまとめられ刊行されたのが『洪範談』である。

海保青陵「談五行」訳注稿（１）（坂本）

- （注 2） 「天地人の三数」という表現からすると、青陵が「之を天地に質し」とあげる書とは『易経』ことかとも思われる。
- （注 3） 『礼記』昏義に「天子立六官、三公、九卿、二十七大夫、八十一元士（天子は六官、三公、九卿、二十七大夫、八十一元士を立つ）」とあり、また「古者天子后立六官、三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一御妻（古者天子の后は六官、三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一御妻を立つ）」とあることをふまえていると考えられる。
- （注 4） 『書経』舜典に「三載考績、三考黜陟（三載にして考績し、三考して黜陟す）」とあることをふまえていると考えられる。この『書経』舜典の文を参考に解釈した。

【原文（六）】

曰、請言洪範、

曰、洪範皆三数也、

曰、首有五行何也、

曰、洪範之言五行、与今之所謂異矣、水火土与金木、大有轻重、雨露自上而隕之類、謂之潤下也、草木自下而萌之類、謂之炎上也、人居其中、用潤下与炎上而以種菑（注 1）、謂之稼穡也、曲直從革、人之所為也、無与稼穡異矣、鋸而為曲、劉為直者皆属木、其位剛、其性柔、不可撓、故曰剛也、可刃斷、故曰柔也、形沈而湿、吾以為是土之属、而受命於水也、鍛圻為方、擘厚為薄、不逆其性、而革其形者、皆属金、其位柔、其性剛、可撓、故曰柔也、不可刃斷、故曰剛也、有光而乾、吾以為是土之属、而受命於火也、

- （注 1） 「用」の字に返り点が三書ともについていないが、此处には「三」点がついていなければ意味が通らない。

【書き下し（六）】

曰く、請ふ洪範を言はんことを、と。

曰く、洪範は皆三の数なり、と。

曰く、首めに五行有るは何ぞや、と。

曰く、洪範の五行を言ふや、今の謂ふ所とは異なれり。水火土と金木とは、

大いに軽重有り。雨露は上よりして隕ちるの類なり。之を潤下と謂ふなり。草木は下よりして萌ゆるの類なり。之を炎上と謂ふなり。人は其の中に居り、潤下と炎上とを用いて以て種蒔す。之を稼穡と謂ふなり。曲直従革は、人の為す所なり。稼穡と異なる無し。鋸きて曲と為り、鋤て直と為る者は皆木に属す。其の位は剛、その性は柔なり。撓むべからず、故に剛と曰ふなり。刃断すべし、故に柔と曰ふなり。沈を形して湿なり。吾以為らく是れ土の属にして、命を水に受くるなりと。円を鍛して方と為り、厚きを撃ちて薄と為り、其の性に逆らわずしてその形を革むる者は、皆金に属す。其の位は柔、其の性は剛なり。撓むべし、故に柔と曰ふなり。刃断すべからず、故に剛と曰ふなり。光有りて乾く。吾以為らく是れ土の属にして命を火に受くるなりと、と。

【現代語訳（六）】

ある者が「洪範についてもお聞かせ願えませんか」と言った。

海保先生は「洪範で説かれていることは全て三の数である」と仰った。

ある者が「（そうであるとするならば）洪範の最初に五行があるのはどうしてですか」と尋ねた（注 1）。

海保先生は「洪範が五行を解釈している説は、今の世の学者が説いている五行の説とは異なっているのだ（注 2）。水・火・土と金・木との間には（その重要性や価値に）大きな差があり、水・火・土の方が重要である（注 3）。雨や露といったものは、上から落下する種類のものであり、このことを「潤下」という（注 4）。草木は下から上へ生え伸びる種類のものであり、このことを「炎上」という（注 5）。人は火と水の中に位置取り（注 6）、水の性質である「潤下」と火の性質である「炎上」とを利用して、それによって植物の種をまいて植え付け栽培する。これを「稼穡」という（注 7）。曲直と従革とは（注 8）、人が為し行うものであって、（その人が為すという意味では）稼穡と異なることがない（注 9）。鋸で引くことによって曲がり、斧で切って真っ直ぐになるものは（注 10）、全て木に代表されるものに属す。木の位は「剛」であり、木の性質は「柔」である。（例えば板を）たわめることは出来ない。そのため「剛」というのである。刃物を用いて切断することが出来る。そのため「柔」というのである。（外見の明るさは）沈み込んで

おり、湿り気を帯びている（注 11）。私が考えるに、木に属するものとは、土に属するものであり、命を水に受けたものなのではないか（注 12）。円形のを鍛錬すると方形となり、厚みのあるものを撃ち叩くと薄くなる（注 13）。（このように）本来の性質に逆らわずにその形体をがらりと変化させるものは、全て金に属するものである。金の位は「柔」であり、金の性質は「剛」である。金はたわめる事が出来る。そのため「柔」というのである。刃物で切断することが出来ない。そのため「剛」というのである。（外見は）光を発していて湿り気はなく乾いている。私が考えるに、金に属するものとは、土に属するものであり、命を火に受けたものなのではないか（注 14）」と。

（注 1） 『書経』洪範において、武王の質問に対する箕子の返答は、「初一日五行」「一五行」とあるように、まずはじめに五行について述べ、水火木金土の五つを並べた上で、それぞれの働きについて解説している。「首有五行」とは、その『書経』洪範の構成をふまえての質問である。

（注 2） 青陵は、後世の学者は古書の字義にこだわり、書かれた文字を読むことに尽力するようになったため、その古書が伝えようとしている「天理」を捉えることが出来なくなつたと考えている。そのため五行についても「後世の儒者には或は心を書物にあづけて、智を文字にあづけておく人もあり。書は死物なり。文字も死物なり。書にのべてある意が活きておるなり。文字にふくみておる意が活ておるなり」「後世の儒者の五行などの合点のゆかぬは其はづの事なり」（『洪範談』『全集』p.616）と、後世の儒者は文字だけで捉えて内容が理解できていないとする。ただしこの「後世の儒者」とは「篇中に後儒とかきたる事多くあり。此は支那の漢以下今の清朝までの人のうわさなり。吾邦の歴代の大儒、当今の碩師先生の事にてはなきなり」（『洪範談』『全集』洪範談小引 p.584）と、青陵は国内の他の儒者からの批判に対する予防線をはっている。

（注 3） 「水火土と金木との間に大きな差がある」とあるが、どちらが重要であるかは述べられていない。ここでは前文【原文（二）】の「故に以て三者に比ぶれば、則ち甚だ軽く賤し」の内容をふまえて金・木の方が価値が低いと解釈した。ここでわざわざ水・火・土と金・木のどちらが重要であるかに触れたのは、『洪範談』では金・木の方が重要だとされているからである。『洪範談』では金・木が

「気」と解釈されていることは【現代語訳（二）】（注 10）で既に述べたが、その気について「気は又水・火・土よりもずっと大いなるものなり」（『洪範談』『全集』p.611）と気の方が重要であると述べている。【原文（六）】において述べられる五行説には、『洪範談』の五行説と異なる点が非常に多い。

- （注 4） 以下の青陵の説は『書経』洪範の「水曰潤下、火曰炎上、木曰曲直、金曰従革、土爰稼穡」をふまえてのものである。『洪範談』では「潤下」を説いて「潤はうるおふなり。潤下は水の性なり」「水とは潤下の物をさしていふ事じゃといふ事なり。水のたくさんありあまりて、外へ及ぶを潤といふ。下へ下へとくだりてうるほひ、しみてひろがるといふ心なり」（『全集』p.618）とある。これを参考に解釈した。
- （注 5） 『洪範談』の「炎上」の説明には「炎は炎天の事なり。かわくなどと云ころなり。火の性は物をかわかして、上へ上へとぼる勢の猛なるものなり」（『全集』p.619）とある。これを参考にした。
- （注 6） 「中に居る」とは『洪範談』「上るでもなく、下るでもなく、中に居て動かずに、物をうみ出しふやすと云ふ心なり。水は下る方、火は上る方、土は中に居て、静にて物のできる方、うごかずに居れ共、養ふ事甚しきゆへに、物ふえると云ふ事なり」（『全集』p.622）にあるように、「土」の火・水に対する表現である。火と水の中に「人が居り」というのは、ここでも恐らく「土」に「人」を配当して解釈していると思われる。「談五行」では一貫して「土」と「人」とを結びつけて解釈しており、そこが『洪範談』と異なる解釈を生み出しているようである。【現代語訳（二）】（注 5）（注 6）（注 9）も参照していただきたい。
- （注 7） 「今木は天の雨露と、地の気にて大きふなる。其木を器用に作るは人なり」（『洪範談』『全集』p.621）とあるように、天・地・人はそれぞれ水・火・土に配され、その天・水の「潤下」の性質と地・火の「炎上」の性質とを利用して植物を「稼穡」するのが人・土であるとされる。「稼穡」とは『洪範談』に「稼は物をうゆるなり。穡は物のできあがりたるを刈るなり。稼穡にて何にても地へうえつけて取り収むるといふ義になるなり」（『全集』p.622）とある。これらを参考に解釈した。
- （注 8） 「曲直とはぎくぎくまがりたると、まっすぐにのびたるとなり」「従革とはしたがつてあらたまると云ふ事なり」（『洪範談』『全集』p.620）。「曲直」とは木材を切って曲げたり真っ直ぐにしたりすることをさし、「従革」とは金属の性質を

変化させずに、形を変化させることをさすと青陵は解釈している。

- （注 9） 「曲直従革」が人の為すこととされるのは、『洪範談』『曲直・従革は人のする事なり』（『全集』p.621）と同じ。『洪範談』には「人は思惟工夫を主とするゆへに、気をつかふは人のうけとりなり。曲直・従革は思惟工夫にあり」（同上）と、人が為すこととされる理由についても説明がある。「談五行」の中では【現代語訳（六）】（注 7）で述べたように「稼穡」は人の為すものとされており、ここでも「稼穡と異なる無し」と述べられている。しかし『洪範談』では「稼穡」は「潤下・炎上・稼穡は天のする事なり」（『全集』p.621）「是曲直・従革とは」とんと別の事なり。潤下・炎上の類なり」（『全集』p.622）と潤下・炎上と並んで天の為す事とされ、人の為す曲直・従革とは異なるとされており、「談五行」の解釈とは異なっている。
- （注 10） 「木はきりてまげ、扱、きりてすぐにするものなり」（『洪範談』『全集』p.620）。「鋸」とは「のこぎりで引いてくること」、「劊」とは斧で木を切ること。これらを参考に解釈した。
- （注 11） 「形沈而湿」は後文の金のところと同様に「有光而乾」とあることから対句と考えて「形」を「あらわす」と動詞に読み、「沈」については『洪範談』『木はうるおひありて陰なり。金はかわきて陽なり。木は光りなふて^{クサキコトナリ}黒^{ヒカルコトナリ}し。金はひかりてありて、^{ヒカルコトナリ}白^{クサキコトナリ}し。木はやわらかなり。金はかたし」（『全集』p.611）とあるのを参考に「光る金」と「沈み込んだ落ち着いた色の木」と解釈した。「黒」や「暗」を使わず「沈」を使った理由は、恐らく「命を水に受け」と水と結び付けを強めたかったからではないかとも思われる。
- （注 12） ここに述べられているように、木を土に属するものとする「談五行」の解釈は『洪範談』の五行説とは大きく異なっている。
- （注 13） 『洪範談』の「従革」の解釈の所に「円にも方にも、四角八角のぞみしだいに打ちてなをすものなり」（『全集』p.620）を参考に解釈した。
- （注 14） 【現代語訳（六）】（注 12）の「木」と同様に、「金」を「土」に属するものとする「談五行」の解釈は『洪範談』の五行説とは大きく異なっている。

（以下続稿）